

『歯科医学史の検証』（中原泉 著，一世出版，¥1,200.）を読んで。

永田和弘 2022. 6. 26.

表紙に副題として

「誰も書けなかった

誰も書かなかった

誰かが書き残さねばならない史実」

とある。

私としては、これに

「誰もが読まねばならない史実」

を加えたい。

一般人も含めて、誰もが考えなかったことで、誰もが考えてみるべきことがここにある。

人は往々にして陥凹に嵌まり込んでしまう。

そして、しかも、人はそれに気が付かない。

与えられた現状の中では、とりあえずは生き延びねばならない。

しかし、その内、いつかはその現状を顧みなければならないときがくる。

「何故、この現状があるのか」と。

この現状は先人が築いた功業の結果であり、また、先人が犯した誤謬の結果でもある。

そして、これらを考察するときに、

自分自身が時代の檻の中から見ていることにもまた気が付かねばならない。

このようなことを教えるのは「歴史」によってである。

このような歴史は一般通念上の歴史ではなく「歴史を考えた歴史」である。

そこでは年代や歴史的事実が目的ではない。それらは考え方の考察の材料ではない。

もちろん、中原の書にある年代や歴史的事実は本書の核心となる部分であるが、著者の意図はそこに止まるものではない。

それを踏まえて、行間に、その先を考えてみてくれと訴えるのである。

学問としての「歯科学」とは、そもそも何であったか。

本書は改めてそのようなことを考えさせる。

実践としての分野とその実践を下支える学術基盤を併せ持つのは歯学も医学も同様である。

同じ身体を考究する学問の一分野なのに、どうして「歯科」だけが医学の範疇にないのか。

どうして、工学部・理学部が4年制なのに、医学部同様に歯学部は6年制なのか。

そもそもが、医学部・歯学部の教養課程とは何か。なぜ2年制なのか。

このような考察なくば、教養・専門課程も医師・歯科医師となるための通過儀礼でしかない。

通過をするための勉強をするのであって、何のための勉強かは考えられていない。

どうして歯学部の教養課程は歯科経済学・歯科心理学・歯科法学ではなく一般諸学なのか。

私の場合も数学も物理学も化学も歯科学に特化したものではなかった。

それで良かったと思っている。

一般経済学をはじめ一般諸学は、歯科医師となってからそのような考え方を日常臨床に持ち込むことにより、歯科臨床の視野が大きく広がるからである。特化させれば、その分だけ視野は狭いものとなろう。

ただ、学生時代はそのようなことは念頭にはない。

ただただ、合格点を取るために必死だった記憶しかない。

これは大学人においても言えることである。

はたしてどのような思いで、学生を教養課程2年間、預かっているのだろうか。

これは大学人に対しては失礼な物言いかもしれない。

しかし実のところ、現状にあっては大学としては、学生を落ちこぼれなく教養課程を通過させることが急務であることには間違いはない。

教養課程から専門課程へ進級させること自体が大きな関門であるからである。

学生のみならず、大学人においても6年制歯科学への考え方は、終戦直後のものとは変わってきている。

終戦直後の大学人は、歯科学創設時代の第1世代の多くはすでに亡く、第2世代に代わっていた。

第2世代の歯科医師たちは、GHQの下で進学課程を1年とするか2年するか
の論争の中を
生き抜いてこられた方々である。

第3世代はナソロジーの世代で、海外渡航が開かれて外国の文献の摂取に全力を挙げた世代である。

半世紀もの遅れを取り戻すのに必死で、2,30年前の終戦直後の第2世代の歯学導入の努力がいかにか
大変だったかを顧みる余裕はなかった。

2000年代に入ると第4世代となり、終戦直後の苦労話はすでに神話でしかなかった。

6年制歯科学への考え方が変化したというのはこのことを指す。

先人あらばこそその現代であるからにして、先人への敬意は大なるも、過去よりも明日が大事であり、明日を迎えるためには今日をどう生きるかがもっと大事である。

このような考え方の中では、過ぎ去ったどうしようもない過去の話はどうでもよい話となってしまう。

今日を最大限に生かしきるためには、むしろ過去からの関心・しがらみを一旦遮断して、
今日ある諸条件・諸環境を最大限に活用する方策を考えるべきという風潮が現れかねない。

ここには恐ろしい陥凹が待ち構えている。遮断する過去も、遮断する方法も、遮断する人も、
実は過去に拘束されていることに気が付かねばならない。

現在は過去と密接に繋がっており、現在・過去の間を切断することはできないのである。

すでに、見ることも叶わず、体験しようもない過去はついつい忘れ去られてしまいがちだが、

それらを亡きものと遮断して今日・明日を考えることは結果として徒勞・無策に陥ることとなろう。

過去を知らずして過去を遮断しても、何を遮断したかが分からないし、重要な現代につながる部分を遮断しているかもしれないからである。

日本はアメリカから歯科学の体系を輸入した。アメリカの歯科学は創建当時から苦渋の道だった。

1839 年のアメリカの最初の歯科学雑誌である American Journal of Dental Science 創刊号の第 1 ページは次の文章で始まっている。

The period has at length arrived, when the profession to which we belong assumes a commanding position in this public eye, and challenges successful rivalry with the other useful and profitable avocations of men.

This fact is not less auspicious to society at large, than to the professor of Dental Science, and the practitioners of the Dental Art.

「ようやくにして時節の到来であります。歯科学が人々の眼にも威儀あるものとなり、歯科学が医学と対等たらしめる時になったのであります。これは、歯科学や歯科医師だけではなく、社会においても喜ばしい限りであります。」

この喜びの背景には、これを遡る数十年の苦渋の努力があった。

日本の現代の第 4 世代の歯科医師は第 2 世代の眞鍋満太らの先人の苦労は知らないし、

日本の第 1 世代の先人たちは 1839 年以前のアメリカの先人たちの苦労は知らなかった。

仕方がないことではあるが、人は目の前に出現している情報、目の前に差し出された情報でしか判断できない。

現状の中での分析・判断はもちろん重要であるが、現状に至る過去の来歴を知ることとは決して無駄なことではない。

そこには現状の本質がより原初的な形で横たわっているからである。
日本はGHQ指導の下、形態的にはほとんどアメリカと同様の形式を揃えた。
アメリカが150年かけて到達した形態を、わずか1年半強で造成したのである。
形式は同じでも、その精神はまた別であった。

どうして、歯科が医学の範疇に入っていないのかを探るためには1800年代のアメリカの状況にまで遡らねばならない。

この原初の苦悩はバルチモア歯科学校創立者であるハイデンに見られる。

日本では医科・歯科の1元論・2元論が長く論争された。

この日本の論争はアメリカの過去の苦悩とは全く別の観点から行われたように私は感じる。

補綴という特殊性に重きを置いたものであったり、歯科学の尊厳という立場であったりした。

しかし、当のアメリカでの歯科学独立は極めて現実的で、医学から対立的に独立したのではなく、

医科の援助の中から創生したのである。

参考になると思われるので、小生の拙稿『歯科技工とは何か』(歯科技工, Vol.12 No.5, P568-569)からの抜粋を本稿末尾に添付したい。

「過去という名の未来へ」文字通り「Back to The Future」である。

中原の本著は、単なる回顧録ではない。先人の歴史を通して、歯科学学生・歯科専門職を救済する活路を示している。

日本の歯学部学生の中には「本当であれば医学部に行きたかった」と思う学生が少なからずいる。

その学生にとっては「歯科」はなんと狭小な世界に見えることだろう。

範囲を「口腔」に広げたところで歯科領域は狭いものである。

もとより、歯科学学生の歯科認識も狭ければ、いわんや、一般人の歯科認識も輪をかけて狭い。

いきおい、この認識は差別となり、ときとして侮蔑のまなざしが投げかけられる。

TVなどでも「金はあるが、あまり賢くない歯科医」が面白おかしく報道されたりする。

これはジャーナリストの歯科界を見る眼である。

筆者にも学生時代に悔しい、しかし、今にしてみれば、微笑ましい思い出がある。

学生時代は「歯科」という狭い世界が嫌で、医学部の人々や医学部のサークルの中に入っていったものだ。

そのサークルの合宿で私にとっては大事件が起きた。

お酒も入りにぎやかな雰囲気の中での私の発言が皆の気を引いた。

「インテリゲンチャの一人として歯科の世界に居る」

場の雰囲気に乗った大言壮語に皆はどっと沸いた。

その中から一人のヤジが飛んだ。「歯医者とはインテリゲンチャか」これにはさらなる大笑いが起こった。しかし、その瞬間この言葉はトンデモナイ言葉であることに気が付いて場は一瞬静まり返った。

「確かに、そう言われる風潮はある。そこで、私は歯科医がインテリゲンチャであるように歯科の世界に入ってきた。」

「頑張り」場は再びにぎやかなものに戻っていた。

こんな事件もある。

「歯医者とは元は大道芸人だったそうじゃないか」目つきは侮辱的なものであった。

「確かに、そのような過去はあった。しかし、それは人間は元は猿であったというに等しい。

猿の中から猿であってはいけないと考えた猿が人間になり、猿のままで良いと考えた猿は現在も猿のままである。皆さんの元はただの猿ではない。」

歯科医の中から、このような屈辱的な内面が語られることは少ないだろう。しかし、この屈折した心理は健全な歯科医の心を複雑なものにしていることもあるだろう。

歯科学の尊厳、歯科医師の尊厳を保ち、知らしめることは簡単なことではない。

私の自己侮蔑から私を解放したのは「歴史」だった。

1970年の大学紛争の中、家庭の事情から私は大学から身を引いた。

大学に身を置かずとも、学問ができる分野は何だろう。私が歴史を選んだのも単純な理由からであった。

1990年に東北大学から「歯学史」の非常勤講師の依頼があった。
レジメづくりから始めるのだが、膨大な医学史の中から歯科に関するものを抽出して歯学史に仕立てるのはつらい寂しい作業であった。

しかし、それは一瞬のことで、私は医学の歴史に眼をみはった。

ヒポクラテス、ガレノスをはじめ近代にいたる大医学者と呼ばれる人の論文には例外なく口腔領域の記述があった。

しかも、彼らの観察眼は現代においても非常に重要なものであった。

彼らの優れた観察眼を連ねた歯学史はそのまま「優れた医学史」になった。

1900年代中葉になると医学の世界は肉眼的観察から電子顕微鏡的観察に移っていった。

歯科の世界は「咬合」という難問に立ち向かい、患者の身になり替わって咬合を感じ取る新たな世界に立ち向かっていた。

医学の世界では Patient Based Medicine や Narrative Based Medicine が叫ばれても、

それらは医師の保全、病院の収益を図るための Evidence Based Medicine の変形でしかなかった。

歯科医ならば誰が考えても分かるであろうが、Evidence Based Denture は鼻からおかしな発想である。Patient Based Denture や Narrative Based Denture ならば、日本では江戸時代から400年に亘り行われてきた。

「死ぬるときは死ぬるがよろしい。」(良寛) これはこれで、一つの日本的救済法である。

歯科学の1元論・2元論の論議も良いが、そして、輸入元のアメリカの過去を尋ねるのも良いが、歯科学をもっと別の観点から見る発想も大事ではないか。

これは、恐らくは西洋においては手が付けられない観点かも知れない。
日本において初めて発想できる風土に我々は身を置いている。これを見過ごす手はない。

「歯科学は医学でなくてはならないが、はたして、

今のような医学にしてしまっても良いのか。」

歯科学は 老若男女・貴賤を問わず、これほど広範囲の人々の救済に当たる職業はない。

しかも、歯科学は工学・建築学・経済学・法学・言語学・歴史学。哲学など実に広く全ての学術と底流している。

すべての学術は歯科の世界に流れ込み、また、歯科学のあらゆる思想は全ての学術に流れ出す。

これは歯科学が生体にミクロン単位の具体的な形態でもって対応し、しかも対象の生体が常に変化し続ける変幻するものであるからであろう。

現代医学はビシャ（1771 - 1802）の「疾病は局所に局在する」に根幹を置いている。

これで、疾病は形態的に分類・分析が可能となり、医学は飛躍的に進歩した。

ビシャは若くして病没したが、ビシャに対する評価は全ての教科書においてすこぶる高い。

しかし一方で、この病理観はヒポクラテス医学が持つ疾病の全身像・生活空間・環境・既往歴ならびに予後観察を希薄なものにしてしまった。

たとえば、虫歯は歯牙組織という局所に局在する疾患とする見方である。そうではない。

虫歯は心身の異常を知らせるサインである。

心身に異変が起これば、身体は中枢部からではなく、抹消部の歯・歯肉・皮膚・毛髪 etc. に症状を引き起こす。

虫歯の除去と修復は身体が発するサインの隠蔽工作に他ならない。

虫歯への第一処置は生活全体への反省である。

甘いものが原因ではない。甘いものを身体に要求させる精神的ストレスが原因である。

歯や歯肉に病変を持ち歯科医院の門をくぐる人は、すでに歯・歯肉以外に心身を病んでいる。

歯科医師は心身全域にわたる医学の最前線にいる。

歯科学は医学の一部ではなく、医学を包含する学問でなくてはならない。

w 終わり

り

Hayden (ハイデン) は、1821 年ごろから 1825 年にかけてマリーランド大学医学部で歯科学の講義を行っているが、結局は彼の医学部歯学科の新設という計画は実現しなかった。

こうした事実と、上記創刊号の明るい序文とは矛盾することになる。この矛盾はどのように理解すればよいのか。

当時においても、マリーランド大学医学部に歯学科が設置されなかったのは、歯科学に対する医学の差別であると捉えた人々が少なからずいた。つまり、マリーランド大学医学部自体が歯学科設置に反対したとする意見である。

こうした見解は、1861 年の Harris への Taylor の追悼文のなかに見られ、以来、Winder (1884 年)、Cordll (1891 年)、Cigrand (1893 年)、Simmon (1904 年) など、多くの人々の文中にもあらわれている 1)。

しかし、事実はむしろ逆である。

マリーランド大学医学部の人々は、Hayden に対し、1840 年に敬意を込めて異例の表彰状を贈っているし、また Harris は、最初の歯科医学校の開講講演において医師たちの惜しみない助力に謝辞を述べている。

また Bond は、第 1 回の卒業生を送り出す言葉のなかで、やはり医師たちの暖かい援助と熱い友情に感謝を捧げている。

それではなぜマリーランド大学医学部に歯学科が設置されなかったのだろうか。

歯科学史家の B.Robinson は、次の二つを原因として挙げている。

一つは、歯科学は独自の教育プランにのっとり教育されるべきであるという判断があったことであり、もう一つは、医学部のなかには歯科学を教授できる適当な人材がなかったということである 2)。

医学部における歯学科の不成立とバルチモア歯科医学校創立に対する医師たちの惜しみない助力というこの表面的なパラドックスを理解するためには、1830 年当時まで遡って、歯科学と医学の状況を知らなければならない。

当時の歯科学の社会に対するプライドは自らの学識と技術であり、当時の歯科学の悲願は、そうした学識と技術を備えた有能な歯科医を養成することにあった。

ゆえに、当時としては、医学部のなかで医学生に歯科学を講ずれば、それでプライドが得られるというものではなかったのである。

医学においてさえ、大学で講義されることと臨床の場での実践との間には大きなギャップがあった。

ましてや、大学に歯学科を設置し、医学生に歯科学を講義したからといって、有能な歯科医が養成される保証はどこにもなかったのである。

加えて、医学部のなかにおいて歯科の技術までも伝達することは、カリキュラムとして不可能であった。

ゆえに、マリーランド大学医学部で歯学科の設置が実現しなかったことと、当時の医師たちの歯科医学校創立に対する惜しめない援助とは、決して矛盾することではなかったのである。

歯科医学校の創立が専門分化した歯科医学の理論と技術を伝授することを目的としたものであるとするならば、Hyden の言葉「Dental surgeon にとって Operative (保存) と Mechanical dentistry (補綴) は決して必須のものではない」はどのように解釈したらよいのか。

これについて著者は、次のように考えている。

もしも、Hyden の言葉の真意が字句どおりのものであったとするならば、彼と共にバルチモア歯科医学校を創設した Harris にも、その考え方の影響がなんらかの形で出ていなければならぬはずである。

しかし、歯科医学校設立の前年に Harris が出版した『The Dental Art, A Practical Treatise on Dental Surgery』の序文においては、Mechanical dentistry を充実することの必要性が唱えられているのである。

また、世界最初の歯科雑誌『American Journal of Dental Surgery』の表紙には「Surgical な、そして Mechanical な最新情報」という副題が付されている。

これらのことから、当時、Mechanical な技術はむしろ重視されており、決してなおざりにはされていなかった。

こうした当時の歯科学の状況を考えるならば、Mechanical な技術を Hayden が軽視するはずはないし、彼自身、そうした気持もなかったと思われる。にもかかわらず、先述の発言となったのは、マリーランド大学医学部に歯学科を設置しようと運動していた中で発せられたことによると思われる。

いいかえれば、矛盾ともいえる Hayden の言葉は、彼が歯科学をどのような形態で学問化しようとしていたかという彼自身の苦悩をそのまま反映していると

言えよう。

いずれにしても、世界最初の歯科医学校は、医学 (Medical science) を目標にしつつ、Operative な、かつ Mechanical な歯科学を必須として出発した。これが、今日の歯科医にとって有益であったか否かを考察することは、まさに歯科学の本質を問う問題である。

文 献

1) Robinson, B.: The Foundation of Professional Dentistry (in Proceedings Dental Centenary Celebration) .Dental Centenary Committge, Baltimore, 1940, 1031-1042.

2) Robinson, B. : Dr Horace H. Hayden and his Influence on Dental Education. Dental Cosmos. 74 : 783-787, 1932. □

追記

若い歯学学徒に歯科の世界に希望を求めるといふよりも希望の灯を灯しに来て欲しい。

歯科は魅力ある仕事であり、生きがいがある人生です。

本当は医者に、弁護士に、建築家に、文学者 etc.になりたかった人は、その志を諦めるな、捨てるな、生涯持ち続けよ。

それに興味を持つということは、その方面にあなたの才能が向いているからだ。歯科の世界はそのような才能を持ったあなたが訪れるのを今や遅しと待っている、

「耳を澄ませて聴くがよい。荒野であなたを呼ばわる者達の声があるのではないか。」

歯科の世界には、その方面の未開拓な分野がいっぱいある。

興味があるものには、人はそれを続けることができる。

だから、毎日 30 分で良い、好きなことの考究を続けなさい。

そうすれば、10 年ではまだ無理か、しかし、20 年もすればその方面の新機軸を得ることになるだろう。「持続は力なり」だ。1 年や数年で、人の眼を引こうとはするな。地道に行け。

(中原泉先生への手紙の一部を改変)